二つの結末
—*Persuasion*の書き改められた章におけるヒロイン像—

Two Endings: The Rewritten Heroine in *Persuasion*

松　村　聡　子
MATSUMURA Satoko

1. はじめに

Persuasion（1818）は，完成されたものとしては，Jane Austen(1775-1817)の最後の作品で，ヒロインのAnne Elliotが一度は別れたかつての恋人，Captain Wentworthと八年越しに再会し，再び結ばれるまでの過程が描かれている。Austenが亡くなったのは，この作品が完成してからほぼ一年後であり，*Persuasion*の執筆中，すでに彼女の健康状態は相当悪化していたといわれている(Austen-Leigh 124; Southam 92)。それでも，Austenは当初書き上げた原稿に満足せず，AnneとWentworthがお互いの心情を理解し合うクライマックスともいえる場面を，全く違った形に書き直している。すなわち，第二巻第十章にあたる部分を削除して，分量的にも拡大し，新たな第十章，第十一章として書き加えたのである。このように新たに書き直された部分の方が，はるかに優れているということで，批評家たちの意見は一致している。[1] しかしこれは，Austenの甥にあたるJames Edward Austen-Leighが述べたように，作者自身が当初の出来栄えを単調で平板だと考え，満足できなかったのだとか，書き直すことで初めてCharles Musgroveや妻のMaryの性格の特徴的な部分を描ききれたのだ(125)，というだけにとどまらないだろう。二つの原稿の間で，Anneの置かれた状況や行動を見てみると，社会的に制約を受けてきた女性の立場がより明確に問題化され，Austenの女性の描き方に対する一つの主張が見えてくるように思われるのである。この小論では，Austenが考え出した当初の結末と書き改められた結末部分を，特にAnneの女性像という点に着目して比較することで，Austenの秘められた主張を読み取っていきたい。なお便宜上，本稿ではこれ以降，Austenが一旦は書き上げながらも破棄した章を削除版，また新たに書き直された部分を完成版と呼んで論じていく。[2]

2. 削除版の結末

まずは，削除版第十章のあらましから見ていきたい。直前の第二巻第九章で旧友のMrs. SmithからMr. Elliotの本性について聞かされたAnneは，当惑し今後のことを愁いながらの帰宅途中に，Admiral Croftから声をかけられる。彼はMrs. Croftを訪ねるようにと，半ば強引にAnneを部屋に引き入れる。ところが，Anneにとって驚いたことに，その部屋にはWentworthが一人で座っていた。しかも，彼女を招き入れた当のAdmiral Croftは，他に用があるからと言って，Wentworthを一旦部屋の外に呼び，Anneに伝えるべき用件を頼んだ上で外出してしまう。このときAdmiral Croftは，ドアのすぐ外で彼に話をしたため，Anneは不本意ながらも，話の内容が彼女自身に関わることだと分かる程度に盗み聞きをする格好になってしまう。その後，部屋に戻ってきてAnneと二人きりの状態に置かれたWentworthは，戸惑いながらも義兄から頼まれた用件を切り出す。それは，AnneがMr. Elliotと結婚して，Kellynchに住むことを希望しているのかどうか，彼女の意向を知りたいということであった。Kellynchの借り手であるCroft夫妻は，もしAnneがそうすることを望んでいるのなら，他に借家を探すというのである。AnneはMr. Elliotと結婚する気はないということを彼に伝える。その後，二人はお互いのまなざしの中に，本当の気持ちを求めるのである。

> He was a moment silent.—She turned her eyes towards him for the first time since his re-entering the room. His colour was varying—& he was looking at her with all the Power & Keenness, which she beleived (sic) no other eyes than his, possessed. "*No* Truth in any such report!—he repeated.—No Truth in any *part* of it?"—"None."—He had been standing by a chair—enjoying the releif (sic) of leaning on it—or of playing with it;—he now sat down—drew it a little nearer to her—& looked, with an expression which had something more than penetration in it, something softer.—Her Countenance did not discourage.—It was a silent, but a very powerful Dialogue;—on his side, Supplication, on her's acceptance.—Still, a little nearer—and a hand taken and pressed—and "Anne, my own dear Anne!"—bursting forth in the fullness of exquisite feeling—and all Suspense & Indecision were over.—They were re-united. (318)

このように，当初Austenが考えた筋書きは，部屋で二人きりになった男女の主人公が，直接互いの愛情を確認し合うというものだった。この引用場面では，Anneが自らの愛情をWentworthに伝えるために，積極的に働きかけるということはない。前日の音楽会でWentworthは，AnneがMr. Elliotと談笑する姿を見て態度を急変させた。その様子に，Anneは彼が嫉妬に駆られているのだと気がついていた。したがってこのときのAnneは，自分とMr. Elliotが結婚するものと思い込んでいるWentworthの誤解を解く必要に迫られていた。けれども，この件に関して最初に口を開いたのはWentworthの方であり，Anneは彼からの問いかけに答える，という態度しか取っていない。また，部屋で二人きりになるという状況も，AnneやWentworthが自らそうなるように画策したわけではなく，むしろAdmiral Croftによって作り出されたものだということができる。すなわち，AnneはWentworthの本当の気持ちを知りたい，そして彼女自身の気持ちを伝えたいという問題を抱えながら，その問題を解決する場を自分の手でこしらえる努力をする前に，うまい具合に他人によって機会が提供されたというのにすぎないのである。こうしてみると，Anneが通りでAdmiral Croftに会ったのは，まさに幸運というよりほかなく，その後の事態も彼女にあまりにも都合よく展開していったように思われる。削除版の第十章を「喜劇的場面」と呼ぶBrian Southamも指摘しているように，この章ではCroft夫妻がまるでおどけた縁結び役のように振る舞い，AnneとWentworthから理性と自立性を持って行動する力を奪っているのである(88)。

上記引用部において，Anneが自らの意思で行動を起こしたといえそうなのは，「視線を彼の方に向けた」ことくらいだろう。二人はお互いの顔を見交わすことで，「寡黙だけれども，とても力強い対話（"a very powerful Dialogue"）」を交わしたのである。しかし，視線に「力強さと鋭さ（"Power & Keenness"）」を伴っていたと描かれるのは，Wentworthだけである。また，この場面では二人の間の物理的な距離が，そのまま二人の心の距離感を表しているといえるが，Anneが同じ場所に座ったままの姿勢でいるのに対し，実際に動いて彼女との間合いを詰めているのもWentworthの方である。いずれも，ここで主導権を握っているのがWentworthであるということを示している。Austenがこの場面を削除したのは，Wentworthの「懇願（"Supplication"）」の視線をAnneが「受け入れたこと（"acceptance"）」という表現が象徴的に示すような，彼女の受け身の姿勢に対する不満があったからではないだろうか。というのも，完成版では，両者の意思疎通を図るのに，Anneはもっと積極的な役割を果たしていくことになるからである。

3. White Hartにて

完成版においてAnneが新たに置かれた状況は，Wentworthと二人きりになれる部屋の代わりに，Musgrove家の人たちがひしめくWhite Hartの一室だった。AnneはWentworthの存在を常に意識

しているが，彼と言葉を交わす機会はなかなかめぐってこない。たとえ彼と同じ部屋の中にいても，他に人目もあることから，もはや二人が直接にお互いの気持ちを確認することは許されないのだ。さらに周囲に人々がいることで，Anneの振る舞いの範囲自体もますます制約される。Wentworthですら，人目のある中でAnneに話しかけるためには，「たぶんすぐそこから離れるという目的のためだけに」(244) 一度暖炉の方へと寄り道をし，そこから方向転換して彼女のそばへ行くという小細工を弄さなければならない。そのようにしてせっかく始めた会話も，長くは続かない。会話が佳境にさしかかるかに思えたとき，Henrietta Musgroveが大きな声で呼びかけたため，二人の会話は中断せざるを得なくなってしまうからである。削除版では早々に二人きりの状況になれたAnneとWentworthであるが，完成版では周囲の人たちに憚って，会話を始めることも，会話を続けることも容易ではないのだ。こうした厳しい状況の中で，Anneはどうにかして自分の気持ちをWentworthに伝えなければならないのである。

次の日，二人は再びWhite Hartで顔を合わせる。Anneの到着後まもなく，Wentworthは手紙を書き始める。その間，AnneはCaptain Harvilleと会話を交わすことになる。二人の話題はほどなく男女の愛情の持ち方の違いへと発展していく。削除版では，AnneはWentworthと二人きりで部屋に残されたとき，「まるで彼の話の中身に彼女自身の命がかかっているかのように」(317) 彼の声を聞いたのであるが，今，Wentworthは手紙を書きながらも，全身を耳にしてAnneの言葉を聞いている。UppercrossでのWentworthは常に話し手であった。「海軍という職業は多くの話題を提供したし，性格的にも話好きだった」(68) という彼の経験談は，Musgrove家の人々の興味をかきたて，皆が熱心に耳を傾けた。さらにAnneとの婚約が破棄された後の八年半の間，Wentworthの海軍での経歴は，海軍名簿で跡付けることができた。しかし，その同じ八年半という時間の中でのAnneの内面生活は，ほとんど誰からも顧みられず，どこにも記録されることがなかった。家庭の中での彼女は，「父や姉にとっては取るに足りない存在で，何を言っても重きを置かれない」という「ただのAnne」でしかない(6)。彼女の父，Sir Walterが何よりも重んじている准男爵名簿には，ただAnneの誕生の記録が載っているだけである。そのAnneが男女の愛情についてHarvilleと静かに交わす会話に，Austenはこれまで語られることのなかった彼女の心情の一端を吐露させているのだ。盗み聞きというモティーフは削除版でも使われていたが，今や二人の立場は逆転し，AnneではなくWentworthの方が聞き手に回っている。[3] そして次の彼女の発言は，Harvilleとともに，明らかにWentworthにも向けられている。

> I believe you equal to every important exertion, and to every domestic forbearance, so long as—if I may be allowed the expression, so long as you have an object. I mean, while the woman you love lives, and lives for you. All the privilege I claim for my own sex (it is not a very enviable one, you need not covet it) is that of loving longest, when existence or when hope is gone. (256)

ここでAnneは，一般化された形で，女性は男性に対して変わらぬ愛を持ち続けると述べているが，これは彼女自身のWentworthへの気持ちにほかならない。つまり彼女は，直接的に愛情を告白することはできないという因習として女性に課された制約は守りながらも，間接的な手法でもって愛を伝えたということになる。また，手法は間接的であっても，Mr. Elliotとの結婚を否定することでWentworthと結ばれることになった削除版とは違って，この場面では彼女の心情はずっとストレートに表明されているといえよう。だからWhite Hartの場面で，Anneが改めてMr. Elliotとの結婚の可能性を否定する必要性は少しもないのである。このように見てくると，完成版におけるWhite HartでのAnneは，Croft邸でWentworthの懇願を受け入れるだけだった削除版のAnneとは明らか

に異なっている。完成版では，彼女の働きかけこそがWentworthの愛の告白を引き出す原動力となったのである。削除版よりも完成版の方がはるかに感動的なのは，このようにAnneが社会的な規範を守りつつも，勇気をもって最大限，自分のなしうることをしたからではないだろうか。

Wentworthの態度も削除版と完成版では異なっている。削除版では，Wentworthは義兄から頼まれた用件を切り出すのに，非常に回りくどい表現を使って，なかなか本題に入ろうとしない。けれども，完成版の方では，手紙の中に示された彼の感情はずっと率直である。

> I can listen no longer in silence. I must speak to you by such means as are within my reach. You pierce my soul. I am half agony, half hope. Tell me not that I am too late, that such precious feelings are gone for ever. I offer myself to you again with a heart even more your own, than when you almost broke it eight years and a half ago. Dare not say that man forgets sooner than woman, that his love has an earlier death. I have loved none but you. Unjust I may have been, weak and resentful I have been, but never inconstant. You alone have brought me to Bath. For you alone I think and plan.—Have you not seen this? Can you fail to have understood my wishes?—I had not waited even these ten days, could I have read your feelings, as I think you must have penetrated mine. I can hardly write. I am every instant hearing something which overpowers me. You sink your voice, but I can distinguish the tones of that voice, when they would be lost on others. (257-58)

短めの文が多い文面からは，必死に耳をそばだてているWentworthの緊張し，興奮に満ちた息遣いまでが伝わってきそうである。手紙の中で彼は，Anneだけのことを思ってBathに来たことを繰り返し述べて，彼女への一途な愛情を訴える反面，彼自身が「不当」で「愚かで憤慨していた」かもしれないとして，率直に自らの弱さをも認めている。それは「他の何よりも，率直で隠し立てのない，熱意に満ちた人を高く評価していた」(175) というAnneの趣味によりかなうものでもあったのだ。AnneはHarvilleとの会話で，「ペンは常に男性たちの手にありました。私は本に何かを証明してもらおうとは思いません」(255) と述べている。ここで引用部の二つ目の文で，Wentworthが“write”ではなく“speak”という動詞を使っていることに注目したい。男性の権力の象徴であるペンを一度取り落し，再び拾って書いた手紙の中で，WentworthはAnneに向かって「書いて」いるというよりは，「話しかけ」ようとしているのである (Tanner 242)。先にも述べたように，ペンによる記録である准男爵名簿には，Anneの誕生の事実が記載されているのみであった。それはAnneが「取るに足りない人 (“nobody”)」(6) であり，彼女の人生など記録する価値がないものだと決めつけるものでもある。これに対して，このWentworthの手紙の宛名は「ほとんど読めないほど」(257) であったと，ペンによる力強さが削がれた形になっているのは注目に値する。これは，Wentworthが男性の権力の象徴であるペンを使ってはいても，Anneの主体性をないがしろにしたり，彼女の判断や行動を縛り付けたりするようなものではないということを端的に表明したものととらえることができるだろう。削除版のプロポーズの場面では，「力強さと鋭さ」がこめられていたのはWentworthの視線であった。しかし，完成版ではAnneの言葉の持つ力がWentworthを圧倒して（“overpower”）彼の心を刺し貫き，今や彼は「ほとんど書くこともできない」ほどだと告げているのだ。

4. Henriettaの結婚とLady Russellへの相談

ここまではAnneとWentworthの二人の動きを中心に，削除版と完成版の違いを検討してきた。これまで見てきたように削除版と完成版では，AnneとWentworthが了解し合う舞台設定や二人の立ち

回りが大きく異なっていることが明らかだが，両者間の違いはそれだけではない。削除版では，AnneとWentworthの愛情確認という重大場面を迎える前に，Anneがすでに Bathで出会っていたささやかな交際範囲の人たちに，新たに登場人物が加わることはない。一方の完成版の方では，Mrs. Musgroveの一行がHarvilleとともにBathにやって来て，Anneと再び関わりを持つようになる。これによって，削除版の方では言及されていなかったり，うやむやになってしまったりしたものの，完成版では取り上げられることになった二つの点を検討していきたい。一つは，HenriettaとCharles Hayterの急速に進んだ結婚話についてであり，もう一つは，AnneがLady RussellやMr. Elliotに対してどういう対応を取ろうとしたのかという点についてである。

削除版では言及されることのなかったHenriettaとHayterの結婚は，完成版においてはMusgrove家の一行がBathを訪れた理由の一つとして挙げられている。娘の婚約の事情について説明するMrs. Musgroveの話しぶりは，Anneの抱えるコミュニケーションの問題を浮き彫りにする。つまらないことまで細々と語る彼女の「力強いささやき」による「開けっ広げのコミュニケーション」(250) は，同じ場面でAnneが直接Wentworthと話すことができないもどかしい切なさとは対照的である。つまりTony Tannerも指摘するように，ここで問題となっているのは，愛する人に率直な愛情を打ち明けて話すことができるようになるのは，婚約と同程度の親密さが確立された後でしかないということなのである (238)。「Charles Hayterがとにかく結婚を熱望しましてね，Henriettaも同じくらいひどいものでしたの」(250) というMrs. Musgroveの説明からは，Hayterだけでなく，Henriettaも強硬に結婚の意思を主張したことがうかがえる。物語の最終盤で何組かのカップルが結婚にこぎつけ，それらのカップルを並置して見せるのは，Austenの常套手段とはいえ，Henriettaの婚約はAnneの状況と並置し比較するためのいくつかの新たな材料を与えてくれるといえるだろう。HenriettaはLymeでも，Hayterのことを念頭におきながら，Dr. ShirleyはUppercrossを完全に引き払ってLymeに住んだ方がいいと思わないかと，Anneに意見を求めるような発言をしている。しかし，いかにもAnneの考えを聞くふりを装っていても，このときのHenriettaが自分の願望を述べているにすぎないことは明白であり，そのことを察したAnneも彼女の気持ちに沿った返事をしている。自分の関心事で頭がいっぱいのHenriettaは，実はAnneも恋に苦しみ悩んでいるのだということに思いが及ばない。だからBathでもこのHenriettaに，AnneはWentworthとの会話をいいところで邪魔されてしまうのだ。同じ恋する女性として，「部屋を出ていかねばならない残念な思いや後ろ髪引かれる思いをHenriettaが分かってくれたら」(245) 少しは同情してくれるのではないかと，Anneは感じずにはいられない。Henriettaが完成版で再び登場してくることで，周囲への配慮や細かな気配りができるAnneの成熟した女性としての魅力が一層強調されるとともに，抑圧された状況下での切迫感もますます高まるのである。

AnneはWentworthと同席して気持ちが動揺しているときに，Henriettaの婚約話を聞かねばならなかったわけだが，さらにMrs. MusgroveとMrs. Croftが，将来が不確かなまま長い期間婚約することについて反対意見を述べるに及んで，Anne自身もこのことを我が身に当てはめてみずにはいられない。このとき，Wentworthも手紙を書いていた手を止めてAnneの方を振り返り，二人は一瞬視線を交わす。いかにして過去の記憶と向き合うかということは，この作品の重要なテーマの一つであるが，直接の意思の疎通が難しい場であっても，八年半前の婚約破棄が二人の間で決して忘れられることがなかったこと，この苦く辛い思い出が二人の間に一瞬にしてよみがえる力を持っていることを，この場面は改めて示しているのである。[4]

削除版のAnneは，Mrs. Smith訪問後の帰宅途中，Mr. Elliotに全幅の信頼を寄せていたLady Russellが，本当のことを知ったら苦しむだろうことを気遣わずにはいられない。けれども，この年配の友人に対してMr. Elliotの真の姿を打ち明け，相談すべきかどうかも含めて，今後どのように接するかを思い定める前に，彼女はAdmiral Croftに声をかけられてしまう。そして前述したように，

その後すぐにWentworthと二人きりの状況に置かれたAnneは，彼の愛情を確認できたため，Lady Russellに相談するかどうかということで頭を悩ます必要がなくなってしまった。それに対して完成版では，Anneは自分の父親や姉にMr. Elliotのことを話すのは無理だと早々にあきらめる反面，Lady Russellにはきちんと情報を伝えようと行動方針を決めている。

> Could the knowledge have been extended through her family!—But this was a vain idea. She must talk to Lady Russell, tell her, consult with her, and having done her best, wait the event with as much composure as possible; and after all, her greatest want of composure would be in that quarter of the mind which could not be opened to Lady Russell, in that flow of anxieties and fears which must be all to herself. (230)

ここでは，父や姉には明かせそうもないMr. Elliotの情報をLady Russellには伝えることで，できるだけ落ち着いて今後に備えたいという，Anneの冷静な判断がうかがえる。しかしそのすぐ後で，彼女がどうしても冷静になれない点——直接の言及はされていないが，もちろんWentworthに関する思いである——については，この友人にも打ち明けて話せないことをはっきりと自覚している。すなわち，Lady Russellの良識を尊重し，相談相手として年配の友人を重んじている反面，個人的な感情面の問題に，もはやLady Russellが立ち入る余地を認めてはいないのだ。

Mrs. Smithの訪問から戻ったAnneは，姉のElizabethやMrs. ClayからMr. ElliotがCamden-placeを訪問したこと，そして夕方にも再びやって来る予定であることを聞かされる。削除版と違って完成版では，Wentworthとの愛を回復させる前に，Anneは再度Mr. Elliotと顔を合わせなければならない。部屋へ入ってくる彼を目にして，彼女は不快感を覚えずにはいられない。

> His attentive deference to her father, contrasted with his former language, was odious; and when she thought of his cruel conduct towards Mrs. Smith, she could hardly bear the sight of his present smiles and mildness, or the sound of his artificial good sentiments. She meant to avoid any such alteration of manners as might provoke a remonstrance on his side. It was a great object with her to escape all enquiry or eclat; but it was her intention to be as decidedly cool to him as might be compatible with their relationship, and to retrace, as quietly as she could, the few steps of unnecessary intimacy she had been gradually led along. (232)

引用部からは，AnneのMr. Elliotに対する不信と嫌悪のもとになっているのは，何をおいても過去の振る舞いや言動を平気で御破算にして，現在の利益の追求だけに勤しむ態度であることがうかがえる。それは，八年半前にWentworthを失って以来，心の傷を引きずったままその痛みに耐えてきた彼女の人生とは，まったく相いれないものである。過去を一切顧みないMr. Elliotの姿勢は，再び婚約をしたあと，お互いの過去の振る舞いや考え方について誠実に向き合って話し合おうとするAnneとWentworthの態度とは好対照をなしている。Mrs. Smithの訪問後にMr. Elliotと顔を合わせて，Anneの彼への嫌悪感は決定的なものとなった。それでも，彼女は彼への態度を急激に変化させないように気を配る。彼と親戚関係であるという事実は解消できない以上，また父や姉がMr. Elliotとの交際を喜んでいる以上，Anneは少しずつ彼との距離を広げていくように努めようとしたのだ。社会的な制約の下，自らの感情のままに行動できない中で，最良の取るべき対応を探っていく彼女の姿勢は，続くWhite Hartの場面にも通じるものがあるといえよう。また，実際にMr. Elliotに会ったことで，Lady Russellへの相談の必要性が一層感じられたに違いない。

しかし，翌日Rivers-streetへ相談に出かけようとしたAnneは，一度目はMrs. Clayによって，そしてその次はCharlesとMary夫妻が突然来訪したことによって妨げられる。結局，AnneはCharlesやMaryと一緒にWhite Hartへ行くことにし，Lady Russellとゆっくり話をするのは次の機会に譲ることにした。「一日話し合いが延びたところで，大した影響はない」(239) とAnneは考える。けれども，その次の日もAnneはWhite Hartに来るように誘われ，Mr. Elliotの正体を明かすのをさらに一日延ばす決断をする。そしてそのまま，Wentworthとの決定的な場面を迎えるのである。

Mr. ElliotについてLady Russellに何も知らせないままに，Wentworthと再び結婚の約束をするという結果は，削除版でも完成版でも同じである。しかし，偶然の成り行きでそうなった感の強い削除版に比べて，完成版はAnneがLady Russellに相談するのは遅らせても構わないと判断した上での結果である点に注意を払うべきである。つまり，Austenはこの変更により，Anneの行為が精神的に自立した女性としてのものであること，そして抑圧された状況の下であってもAnneが主体的に判断し，行動した点を強く打ち出そうとしたのである。

5. おわりに

完成版でのAnneとWentworthは，思いが通じ合った後，ついに直接いろいろなことを話し合えるようになった。けれどもこの状況は，削除版に描かれていたような，二人だけの空間や時間がある程度保証された室内ではない。削除版では，Croft夫妻の「物音がしたからと階上に行き，勘定を支払うからと階下へ行き，ランプの芯を切るからと踊り場に行く」(318) という気回しによって，夜まで引き止められたAnneには，しばしばWentworthと二人だけで語り合う機会が提供された。一方，完成版での二人は，Bathの街中をゆっくり歩きながら，過去を振り返り思いのたけを語り合う。二人の周囲には行きかう雑多な人々がおり，語り手はこうした状況を述べるのを忘れてはいない。

> And there, as they slowly paced the gradual ascent, heedless of every group around them, seeing neither sauntering politicians, bustling house-keepers, flirting girls, nor nursery-maids and children, they could indulge in those retrospections and acknowledgments, and especially in those explanations of what had directly preceded the present moment, which were so poignant and so ceaseless in interest. (261-62)

もともとAnneはBathの街の雑踏を嫌っていた。「馬車が走り去る音やガタゴトいう荷車や荷馬車の音，新聞売りや，マフィン売り，牛乳売りなどの呼び売りの声，絶えずカタカタいうパッテン靴の音」(146) などは，Lady Russellの耳には心地よく響いても，Anneには決してそうではなかった。しかし今，二人はお互いの世界に浸りきっていて，周囲でどのような人が行きかおうと，またどのような音がしようと，まったく気に留めていない。White Hartでは周囲の状況に気遣いながら，どうにか意思を疎通する方法を探りあった二人であるが，もはや周囲がどんなに騒がしかろうと，二人の世界を邪魔することはできないのである。その晩のCamden-placeでのパーティでも同様のことがいえるようだ。友人知人に囲まれ，AnneとWentworthはここでも二人だけの時間を長く持つことはできない。それでも，「美しく飾られた温室の植物に一緒に見とれるふりをしながら」(267) 語らうなど，たとえ短い間でも言葉を交わす時間を確保できている。周囲の状況がどうであろうと，二人のコミュニケーションにもはや支障が生じることはないのである。

様々な社会的な制約下で，どのように自らの愛情を愛する人に伝えたらよいか。この難しい問題に，AustenはAnneに間接的な手法を取らせることで挑んだ。Austenには，社会的な因習を打ち壊そうという姿勢は見られない。けれども因習の中にどっぷりと浸かっているだけということも是としなかったのではないだろうか。*Persuasion*のクライマックスの部分を書き直すことで，AustenがAnneに託

したものは，しとやかでありながらも，困難な状況に立ち向かって自らの気持ちを何とか伝えようと苦闘する力強い女性像だったのである。

最終章において，Anneとの結婚の夢が破れたMr. Elliotは，密かにBathを去る。Sir Walterと結婚してElliot家の女主人の座に着こうという野心を抱いていたMrs. Clayもまた，突然Bathから姿を消し，やがてLondonでMr. Elliotの庇護を受けている，という話が伝わってくる。自分の利益のことしか考えないMrs. Clayは，常にAnneの，そしてAustenの批判の対象であり，Mr. Elliotとともに，あたかも追い払われるかのように小説の舞台から姿を消してしまう。[5] こうして彼女のLady Elliotになるという野望は，一見すると潰えてしまったかのように思われる。しかしながら語り手は，今度は彼女がMr. Elliotを丸め込んで，彼の妻の座に収まってしまうかもしれない，と示唆することを忘れていない。Mr. ElliotはKellynchの推定相続人であり，Mrs. Clay以外にSir Walterが再婚する可能性のある女性は，作品内で一切言及されていないことを考え合わせると，Mrs. Clayが当初目論んだのとは違う形であれ，やがてはKellynchの女主人の座に就くことも大いにありうる，ということがいえる。Anneの結婚がKellynchを救うことはできない。むしろより利己的で享楽的な人物にKellynchが引き継がれてしまう危険性の方がはるかに高く，それは戦争の暗示と相まって，*Persuasion*の結末に暗い影を落とすことになる。Maryが「AnneにはUppercrossのような屋敷を相続する見込みはないし，地所もなければ一家の長でもない」(272) と自らを慰めているように，Austenの小説のヒロインたちの中で，Anneは唯一，土地に基づかない結婚生活を送らねばならない。Anneが結婚後にどこに住むようになったのかについての具体的な記述は何もなく，他のヒロインたちに比べると，Anneの未来には不安定な要素が多いといえるだろう。だからこそ，Austenは完成版でAnneに受身的な態度を取らせるのではなく，自らの手で何とか人生を切り開いていく，より積極的なヒロイン像を託したのである。

注

1　例えばTony Tannerは削除された部分は「とても単純」で「ぎこちない解決法」だと述べているし (236-37)，登場人物の身体と内面の関連性を重視して読みを展開するJohn Wiltshireも書き直された章の方が内容の充実ぶりと豊かさではるかに優れているとしている (191)。

2 最終章（削除版では第二巻第十一章，完成版では第二巻第十二章にあたる）については，いくつかの語句の修正が施されているものの，削除版の内容がほぼそのまま完成版に引き継がれている。この最終章の異同について扱うことは，本小論の手に余る。この点に関しての詳しい比較検討は，Jocelyn Harrisの著作の第三章を参照されたい。

3 Stuart M. Taveは，聞き役だったAnneが聞かれる側に回ることで，Anneの言葉の重みが大きく異なっていることを重視している (266)。Southamはさらに，削除版では盗み聞きの場面に混乱と誤解が伴っていたのに対し，完成版では明晰さと洞察力が描かれていると指摘している (94)。

4 フランス革命とそれに続く戦争の二十年で，歴史の展開のペースが速まり，過去が急速に遠のいていくように当時のイギリス人たちが感じていた中，Austenはいかにして過去の記憶を保つか，過去にいかに向き合っていくかという点を，*Persuasion*を通して探っているのだとDeidre Shauna Lynchは論じている (ix-x)。

5 TannerはMrs. Clayの名前の響き（“clay”は「泥土」という意味）からも彼女が道徳的に腐敗していることが暗示されていると指摘している。加えてTannerは，彼女に「そばかす」が多いことも道徳的に「汚れて」いることを，さらにはその「そばかす」が梅毒の跡である可能性までも示唆している (237)。

引用文献

Austen, Jane. *Persuasion*. 1818. Ed. Janet Todd and Antje Blank. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Austen-Leigh, J[ames] E[dward]. *A Memoir of Jane Austen and Other Family Recollections*. Ed. Kathryn Sutherland. Oxford: Oxford UP, 2002.

Harris, Jocelyn. *A Revolution Almost beyond Expression: Jane Austen's* Persuasion. Newark: U of

Delaware P, 2010.

Lynch, Deidre Shauna. Introduction. *Persuasion*. By Jane Austen. Ed. James Kinsley. Oxford: Oxford UP, 2004. vii-xxxiii.

Southam, Brian C. *Jane Austen's Literary Manuscripts: A Study of the Novelist's Development through the Surviving Papers*. 1964. London: Athlone, 2001.

Tanner, Tony. *Jane Austen*. London: Macmillan Education, 1986.

Tave, M. Stuart. *Some Words of Jane Austen*. Chicago: U of Chicago P, 1973.

Wiltshire, John. *Jane Austen and the Body: 'The picture of health.'* Cambridge: Cambridge UP, 1992.